

HOPE

ブルゴーニュ小史(5)

饗庭 孝男

あえば・たかお

1930年、滋賀県生まれ。フランス文学者。文芸評論家。

著書に、『石と光の思想』(勁草書房)、『小林秀雄とその時代』(文芸春秋)、『恩寵の音楽』(音楽の友社)、『西歌と愛』(小林書房)、『幻想の都市—ヨーロッパ文化の象徴的空間—』(新潮社)、『ヨーロッパの四季』(東京書籍)、『ヨーロッパ古寺巡礼』(新潮社)など多数。

デジョンの「解放広場(プラス・ドラ・リベラシオン)」は半円であり、ヴェルサイユ宮をつくった建築家、マンサールの設計によるものであり、古代的で端正なおもむきがある。その前、道をはさんで左にブルゴーニュ公の館があり、つながった形の右側が美術館である。このなかにはイタリア初期からフランドル、ネーデルラント関係の絵画、彫刻、陶器等の作品が華やかに陳列されているが、それらの多くはかつて、14世紀から15世紀後半にかけて、いわゆるホインガーの言う『中世の秋』を彩るものである。

15世紀の1477年、ブルゴーニュ公、シャルル豪胆公(ル・テイルール)の死まで、すなわちブルゴーニュ公国がもっとも栄えた時の版図は、ブルゴーニュ地方、フランシュ・コンテと北仏のピカルディ、アルトワ、今のベルギーであるフランドル、そしてリュクサンブルク、ユトレヒトを中心とするネーデルラント等を含むものであった。したがってこれらの領土はまさしく一つの国に値する大きさや勢力を持っていたと言ってもよい。

それでは何故ここまでブルゴーニュ公国が栄えたのか、という理由が問われなければならないだろう。すでに前回でふれたように、この公国はゲルマン系のブルグント王国の解体に発し、またシャルルマーニュ大帝死後のヴェルダン条約によって三分割された後、ソヌ河の東西を占めたのであるが、シャルル禿頭王の死後、弟のリシャールが治め、カペ王朝に継がれた。ブルゴーニュ公国の成立には、こうした政治的理由のほかに、前回で言及したクリュニー会とシトー会というヨーロッパのキリスト教再生の原動力というべき宗教的拠点が意味をもっていたことを知るべきであろう。

やがて、カペ王朝のブルゴーニュ公であったフィリップ・ド・ルヴェールが死に、国王ジャンがこれを引きつぐものの、ジャンが亡くなった後、弟のフィリップがブルゴーニュを領有することとなる。したがって1363年、ブルグニュー公家が広い意味でフランスのヴァロワ王朝のものではあるが、狭い意味では一種の自立した国の形をとるに至るのである。そこから、このフィリップ大胆公(ル・アルディ/1404年没)、ジャン無畏公(サン・プール/1419年没)、フィリップ善良公(ル・ボン/1467年没)、シャルル豪胆公(ル・テイルール/1477年没)といずれも特徴のある諸公がこの公国の名をたかからしめた。しかし、最後の豪胆王はスイスとの戦いに敗れて亡くなり、男の子に恵まれず、また一人娘のマリーがハプスブルグ家のマクシミリアンと結婚したこともあり、フランドルはハプスブルグ家に、ブルゴーニュ公領はフランスのルイ十一世の手にわたり、遂に歴史から姿を消すに至るのである。

しかし、このブルゴーニュ公国は、フランスとドイツの間にあり、人口6~700万を有し、葡萄酒、小麦、塩、牧畜、銀行、石炭等の資源や産物に加え、かつてのフランドル、ネーデルラントの海上貿易都市をもち、さらにライン河やロワール河の河川貿易によって富をあつめた。そうしたものがデジョン、ブリュージュ、ブリュッセルの都市



を首都として多極的にこの公国を潤したと言ってもよい。

その上、ブルゴーニュ公は、P・ガクノットによれば、「十二貴族(ペール・ド・フランス)の筆頭であり、この資格で、高等法院の管轄に属しており、また国王の近親者であり、王国の摂政の一人である。にもかかわらず、彼は実際は外国の君主である。高価な装飾によって、華々しい儀式によって、贅沢な饗宴と衣服と宝石と食器類によって、デジョンの宮廷は狂気の国王(フランスのシャルル六世のこ)の貧しい宮廷を圧倒している」(『フランス人の歴史』林田・下野訳)ことはたしかであった。

もとより内紛がなかったわけではない。フィリップ大胆公(ル・アルディ)の死後、長男のジャン無畏公は父の政策をついだものの、王の弟ルイ・ドルレアンに押さえられる。これを怒った彼はルイを暗殺するが、ドルレアンの遺子に娘をどつがせていたアルマニャック公がジャンに対抗し、フランスは二分される。そこにつけこんだイギリス王、ヘンリー五世がフランスに軍を送ってアルマニャック派を倒す。その間にブルゴーニュ派はイギリスと和平交渉をするが、ジャンは惨殺される。しかしやがてシャルル七世もイギリスに勝ち、またブルゴーニュ派もアルマニャック派と和平し、「アラスの平和」がもたらされるという争乱があった。

さて、フィリップ善良公の時代、デジョンはヨーロッパの中心となり、フランドル画の傑作もここで生まれた。音楽で言えば「礼拝堂楽団」をもち、宮廷の世俗音楽を洗練させ、15人から16人をもって構成される団員はネーデルラント人が多く、また「ミストレル楽団」にはヨーロッパ中から楽士が集まったのである。さらにこの宮廷の食事作法は各国につたえられたが、中でもハプスブルグ家とのマリーの結婚がウイーンの宮廷に、このブルゴーニュ公国の文化の粋を伝え、それが長く一つの範となったことは刮目すべき事実であろう。(了)

Château de Chailly

シャトー・ドゥ・シャイイ

中世がまだに息づいているブルゴーニュにいらっしゃいませんか?数々の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、中世そのままの街並、美しく広がる大地や小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。

お問い合わせは(株)多商会ブルゴーニュ事業部へどうぞ
TEL:03-5762-3010 担当:岩沢、田中

